入選（高学年の部）

# 太陽のような私の妹

神奈川県　横浜市立藤の木小学校 六年
久保田（くぼた） 紗礼（さあや）

「妹がほしいな。生まれないかな。ママのお腹の中に女の子いないの？ママのお腹、ふくらんでいないの？」

幼稚園の年少や年中のときだろうか。私は母に、お風呂で毎日、毎日、こんなことを言っていた。もし妹が生まれたら、遊んだり、色々なことを教えたりしたいと思っていた。

十月二十七日。私が年中のときである。ずっとほしかった妹が生まれたのである。そして、母のお腹に乗ってねる度に、

「生まれてきて良かったね。」

と笑顔で言った。自分に妹ができて嬉しくて、嬉しくて、たまらなかったのだ。妹とねたときさわった妹の小さな手は、あたたかく、やわらかかった。そんな小さな、かわいい妹と一緒にいれると思うだけで、幸せだった。

ある日、母に注意され、私はふてくされて、泣いて、部屋を出ていった。別の部屋で泣いていると、ドアが開いた音がした。顔を上げると、そこにはまだ一歳か二歳である妹がいたのだ。そして、私の所に来て、小さな手で頭を優しくなでてくれたのだ。私の心の中は、涙の水たまりが消え、あたたかい太陽の光で照らされた。私は、優しい妹がいて、とても幸せであると、心の底から思った。妹に、色々教えるつもりが、むしろ、私が妹に、優しくすることの大切さを教えられた。その優しさは、六歳になった今の妹でも変わらない。私が泣いているとき、小さかったときのように、優しく頭をなでてくれる。そして、

「だいじょうぶだよ。泣かないで。」

と言ってくれるのだ。妹の優しさは、他のときにも表われる。私は六年生になってから、勉強をする時間が前と比べて多くなったため、少しつかれている。妹は、そのことを察したのか、折り紙に手紙をかいてくれたのだ。妹が書いてくれた手紙には、かわいい絵がかかれていて、カラフルで、ダイナミックな文字が並んでいた。

「おうえんしているよ！がんばれ！べんきょう」

私は、妹が一生懸命書いてくれた手紙を毎朝読んで、勉強を頑張っている。

私は、そんな妹が世界一、いや、宇宙一好きである。妹がいたら、どんなことでも頑張れるような気がする。私にとって、妹は、太陽のようである。私のエネルギーは、その太陽のあたたかい光である。今の私がいるのは、妹が、大事なことを教えてくれたからである。だから、そんな妹に「ありがとう」を、たくさん、たくさん言いたい。そして、ここにもたくさん、たくさん書きたい。太陽が生きている日にちだけ、「ありがとう」と言っても、全然足りない。しかし、そんなに「ありがとう」と言うこともできないし、書くこともできない。だから、一回だけだが、ここに書く。

「ありがとう。そして、大好きだよ。」